

日本地理学会2025年秋季学術大会

日本地理学会2024年秋季学術大会は青森県弘前市の弘前大学において、9月20日（土）、21日（日）を中心開催された。

口頭発表における「人口・行動」に関する報告は、以下の通りである。これらの報告以外にも、人口減少社会における広範な問題に関する興味深い報告も見られた。例えば、地方都市における分譲マンションの持続可能性、東京大都市圏における墓地供給、青森市の除雪体制に関する報告が見られた。これらの報告は、人口減少に伴う課題の顕在化により、社会におけるさまざまな制度の在り方について、早急な見直しが必要となってきることを感じずにはいられなかった。また、当研究所からは下記の小池司朗部長ほかの報告以外にも、久井情在室長が「広域地名「奥州」の市名化に関するスケル論からの考察」と題した報告を行った。

「日本の都市圏における通勤者の重力モデルの改善：時間および空間構造に基づく解釈」

……………鄭軼璇（東京科学大学・院）、高安秀樹（東京科学大学）、高安美佐子（東京科学大学）
「都道府県間人口移動変化の人口学的要因分析—日本人と外国人の比較を中心に—」

……………小池司朗、中川雅貴、菅桂太（国立社会保障・人口問題研究所）
「多様な世代で構成される高齢年大規模住宅団地の実態と世代循環」

……………森泰三（ノートルダム清心女子大学）

（貴志匡博 記）

経済地理学会2025年度地域大会

経済地理学会2025年度地域大会は、10/11（土）に北海道教育大学函館校（北海道函館市）においてシンポジウム形式で開催された。主催は、経済地理学会北東支部と日本学術会議地域研究委員会縮小社会の地域構想分科会であり、筆者は日本学術会議の連携会員として当分科会に参加している。

「縮小社会の地域構想」をテーマとしたシンポジウムは、第1部が地方自治体職員の報告による「実務家の視点から」、第2部が研究者の報告による「学術の視点から」という2部構成であった。第2部は分科会の議論のなかで立てられた「人口減少と東京一極集中」「地域生活圏」「産業立地と地域政策」「多文化共生」の4本の柱で報告が行われ、筆者は「人口減少と東京一極集中」の報告を務めた。第1部も含め、すべての報告はそれぞれ独創的な視点を基とする充実した内容で示唆に富んでおり、活発な質疑応答も相まって有意義な地域大会となった。

（小池司朗 記）

第90回日本健康学会総会

2025年10月11～12日に、北海道大学にて第90回日本健康学会総会が開催された。筆者は、大会長である山内太郎北海道大学教授が座長を務める「人類はどこに向かうのか：日本と世界の人口変動から見えてくるもの」と題する基調講演および谷口真人 総合地球環境学研究所研究基盤国際センター教授との鼎談、さらに「老衰死の現状と今後の対応」と題する口演（今永光彦 奏診療所医師、木下博之 科学警察研究所長、丸井英二 人間総合科学大学教授との共同報告）を行った。

日本健康学会の英語名は、Japanese Society of Health and Human Ecology、直訳すれば日本健康・人類生態学会であり、プラネタリーヘルス、ワンヘルスとの親和性が高い。今回の総会では、SDGs、ワンヘルス、気候変動に関するシンポジウムが行われ、ヒトを含めた広く地球規模の健康が議論された。
(林 玲子 記)

東京確率論セミナー 招待講演

2025年10月20日、東京大学で開催された「東京確率論セミナー」において、「Fredholm Integral Equations and Eigenstructure: Genealogical Expansions via Non-Hilbert–Schmidt Solutions」という題目で招待講演を行った。本講演では、ヒルベルト・シュミット条件を超えた設定でのFredholm積分方程式の固有構造を、Fredholm行列式を用いない系譜展開によって構成する新しい理論を紹介した。講演は板書形式で行い、積分方程式の解析的構造や、マルコフ連鎖のタブル確率との対応を詳説した。さらに、部分ベル多項式や分歧過程の展開に関連して、確率論の専門家から多くの関心と質問が寄せられ、数理人口学と確率論の新たな接点を提示する討論が行われた。参加者との議論を通じ、Fredholm理論の枠組みが進化過程や系譜的記憶の数理理解に拡張可能であることを確認できた意義深い機会となった。
(大泉 嶺 記)

第84回日本公衆衛生学会総会

第84回日本公衆衛生学会総会は、10/29（水）～10/31（金）に静岡県コンベンションアーツセンター（グランシップ：静岡県静岡市）において開催された。筆者は本学会に初めて参加したが、本学会の80年以上の歴史の中で初めて静岡県での開催になったということである。

研究所からは、林所長と筆者がシンポジウム「へき地医療の新たな展望～へき地の現状と人口動態に基づく医療ニーズ分析から～」に登壇し、報告を行った。本シンポジウムは、林所長と筆者が研究分担者として参加している厚労科研「へき地医療の現状把握と人口動態に基づく医療ニーズを考慮した将来のへき地医療体制の構築に資する調査研究」（令和6～8年度：研究代表者：菖蒲川由郷特任教授（新潟大学））の研究成果を報告する場として位置づけられる。本シンポジウムのプログラムは下記のとおりであり、菖蒲川特任教授と宮田潤助教（長崎大学）が座長を務めた。

- ・菖蒲川由郷「無医地区の現状と再定義の検討」
- ・林玲子「へき地と非へき地で健康格差はあるのか？－歴史的推移を踏まえて」
- ・杉田義博（日光市民病院）「厚生労働省へき地医療現況調査の分析と新たなへき地診療所・へき地医療拠点病院に対する調査」
- ・小池司朗「過疎地域における将来人口見通しと旧市町村別人口分析」

へき地医療にまつわる課題は山積しているが、本シンポジウムでは多角的な観点からの報告が行われるとともに、活発な質疑応答が交わされ、厚労科研プロジェクト全体にとっても大変有意義な機会となった。

上記のほか、研究所からは林所長が「NDBデータによる日本の疾病統計－ICD-11疾病分類別の患者数と複合傷病構造」というタイトルでポスター報告も行った。
(小池司朗 記)